完 了 報 告 書

記入年月日 2026 年 2 月 16 日
採択団体名　横浜市金沢区周辺地区共助連絡会

■事業概要

基本情報	
事業名	沿岸工業団地を有する地域（横浜市金沢区周辺地区）における協働防災教育
事業内容	事業内容①：「横浜金沢区周辺地区共助連絡会」の開催 事業内容②：防災セッション 事業内容③：防災備えパネル展示
事業背景	横浜市金沢区周辺地区は、沿岸部に工業団地と住宅地が隣接しており、津波・高潮・液状化などの災害リスクを抱える地域である。区の人口は約 20 万人（2020 年国勢調査：約 198,939 人）で、昼間は工業団地で勤務するワーカー（数千人規模）が加わることで人口が増加し、災害時には住民とワーカー双方の避難が同時に必要となる。 このため、地域住民と工業団地ワーカーが協力し、迅速な避難行動・避難所運営・通信情報の確保を組み込んだ実効性ある防災体制を構築することが重要になっている。
コミュニティ設立の経緯	弊社（本連絡会の代表）は、SDGs や社会貢献をテーマにしたエデュテインメント（教育＋エンターテインメント）事業を NPO 法人医療ネットワーク支援センター*と連携し、展開している。 実績① 防災やまちづくり、社会課題を「楽しく学べる」プログラムへと昇華させ、講義・教材・体験型アトラクションとして提供することで、市民や企業にわかりやすく普及してきた。 実績② 「防災まちづくり」をテーマとしたプロジェクトでは、医療ネットワーク支援センターと連携した震災避難者支援の現場経験やプロボノ活動を活かし、地域・行政・教育機関をつなぐ新しい学びの場を創出してきた。 （*医療ネットワーク支援センター：東日本大震災発災翌月から首都圏における県外避難者支援を継続し、その経験をもとに「人に寄り添う防災教育」を展開。オンライン教材サイト『コミカレ』や「語り部授業」を通じて、地域住民・学校教育・教員研修・企業研修に幅広く知見を提供している。） 連携団体の野村不動産株式会社は、上記と別事業で弊社と関わりがある会社で、近年物流施設事業を展開する中で、地域に根差した施設として防災にも注力している。沿岸部の海抜 2 メートル地域に建設された Landport 横浜杉田では津波避難施設として登録されていることもあり、地域住民やワーカーの顔の見えるコミュニティづくりを目指していたことから、コミュニティの防災リテラシー向上を目指し、連携いただきながら本連絡会を設立。また Landport 横浜杉田と接点のあった地域住民の金沢区自助連絡協議会も連携。また、地域の鉄道会社である株式会社横浜シーサイドラインも沿線の活性化を目指して、住民への防災情報発信の機会のため協力いただく事になった。 コミュニティ形成においては物流施設＝津波避難施設を軸に、顔の見える関係づくりをテーマとして、連絡会開催のほか、地域の交流機会を捉えて対話することに努めてきた。
本事業に関する過去の取り組み内容	・防災教育に関する取り組みは、今回の本事業においてスタートしたものであり、過去の取組は、弊社の上記記載の実績等になる。 ・連携団体との関係性も上記に記載の通りとなる。
事業体制	・野村不動産株式会社　都市開発第二事業本部　物流事業部　事業企画課： 事業内容①のテナント企業、住民団体との調整 事業内容②の告知協力・会場協力 事業内容③の展示　会場協力 ・金沢区自助連絡協議会： 事業内容①の地域住民との連絡窓口 ・株式会社横浜シーサイドライン　運輸部営業課： 事業内容②の協力

	・特定非営利活動法人医療ネットワーク支援センター： 事業内容①③の震災時避難、防災知見協力 事業内容②の渉外活動（震災経験者）
全体スケジュール	〈9 月下旬〉 ・キックオフ ・関係者打合せ（地域団体・物流倉庫企業・工業団地企業） ・広報活動（チラシ・Web・SNS による参加募集） 〈11 月〉 ・防災セッション①の実施（避難経路体験、震災の教訓講演、対象：企業防災担当、地域住民） 〈12 月〉 ・防災セッション②の実施（避難経路体験、震災の教訓講演、対象：地域住民親子） ・内閣府事業統括事務局に中間報告提出 〈1 月〉 ・防災備えパネル展示　実施 ・成果と専門的情報を整理し、防災冊子、動画を作成 ・地域住民・テナント企業防災担当・工業団地関係者への冊子配布 ・次年度に向けた改善点の検討 〈2 月〉 成果報告書　提出
事業目標・事業成果	
事業目標全般 （教育提供者側）	・地域住民と工業団地ワーカーが共に学ぶ、防災教育プログラムを設計・提供する ・物流倉庫・企業・自治会による協働体制を構築する ・津波発生時の迅速な避難行動・避難所活用を体験的に学ぶ機会を提供する ・災害時の通信手段（災害用伝言ダイヤル 171 等）を体験的に学ぶ場を設ける ・紙媒体とデジタル媒体を活用し、継続的な防災教育の基盤を整備する
事業成果全般 （教育提供者）	・本事業を通じて、地域住民・物流施設事業者・自治会等が同じ場で防災を学び、顔の見える関係を構築する第一歩を踏み出すことができた。 ・特に「地域住民＝工業団地で就労するワーカー」という地域特性を共有しながら、防災を自分事として捉える視点を提供できた点は、本事業の大きな成果である。 ・また、避難経路体験や被災体験の共有を通じて、机上ではなく体験を通じた防災教育を実践でき、今後の継続的な防災教育の基盤を整えることができた。 ・発災から避難所生活までの各段階における課題と対応策を整理し、視覚的に分かりやすい啓発パネルとして体系化した。さらに冊子と動画として、紙媒体（リーフレット）とデジタル媒体（動画）の両方を活用して発信できた。
事業目標全般 （参加者側）	・地域住民および工業団地ワーカーが、災害発生時に「自分はどこにいて、どう行動するか」を具体的に想定できるようになることを目標とした。 ・また、津波避難施設の存在や避難経路、家族との安否確認方法について理解を深め、災害時に迷わず行動できる意識を醸成することを目指した。
事業成果全般 （参加者側）	・参加者からは「避難経路を実際に歩いたことで、距離感や時間を実感できた」「倉庫が避難施設になることを初めて知った」といった声が聞かれ、防災を具体的にイメージするきっかけとなった。 ・被災体験談を聞くことで、発災直後の判断の重要性や、共助の必要性について理解が深まった。 ・親子参加型の回では、子どもが主体的に防災について考え、家庭内で話題にするきっかけづくりにもつながった。 ・啓発パネルや冊子・動画を通じて防災を日常の中で考えたり、職場や家庭内において繰り返し確かめたりできる環境を得た。
展開できる 知見やノウハウ	沿岸部の工業団地と住宅地が隣接する地域において、「職場」と「地域」を分けずに捉えた防災教育は有効であることが確認できた。 避難経路体験や被災体験の共有を組み合わせることで、参加者が防災を自分事として捉えやすくなることが分かった。教材としては、紙媒体とデジタル媒体を併用することで、セッションに参加できなかった住民やワーカーにも学びを広げられる点が、他地域でも応用可能なモデルである。

コミュニティ防災教育の重要な観点	地域特性を丁寧に共有し、「なぜこの地域では共助が重要なのか」を理解してもらうことが、防災教育の出発点として重要である。 そして一過性のイベントに終わらせず、顔の見える関係づくりを通じて、継続的な学びと関係性を育てる視点が不可欠であると感じた。また、子どもや親子世代を巻き込むことで、防災意識が家庭内・地域内に波及する可能性が高まる。
残課題等	・単発実施にとどまらず、継続的な学び・実践の機会と、それを実現する体制が引き続き重要である。 ・平日昼間に参加しにくい層や、情報にアクセスしづらい住民への周知が課題として残っている。 ・今後は、デジタル回覧板や冊子配布の工夫により、より多様な層への情報提供を進める必要がある。 ・共助の実践につなげるため、次回以降は避難所運営や役割分担をより具体的に体験できるプログラムへの発展を検討する。

■事業内容

<table>
<tr><th colspan="3">事業内容① 「横浜市金沢区周辺地区共助連絡会」の開催</th></tr>
<tr><td>事業内容①目標
（提供者側）</td><td colspan="2">■防災教育の提供者
・地域住民、工業団地企業、物流倉庫事業者が継続的に情報共有できる場を構築する。
・防災教育を単発で終わらせず、次年度以降につながる協働体制を形成する。</td></tr>
<tr><td>事業内容①目標
（参加者側）</td><td colspan="2">■防災教育の参加者
・地域の防災課題を自分事として理解し、災害時に取るべき行動を具体的にイメージできるようになる。
・顔の見える関係づくりを通じて、災害時に声を掛け合える関係性を築く。</td></tr>
<tr><td>事業内容①
実施内容 A
（実施日：
9/20,10/11,
10,17,10/26,
12/4）</td><td>■具体的な取り組み内容

・9/20
地域住民、自治会、物流倉庫事業者等の関係者が顔合わせをおこなった。
防災に関して各々の立場で日頃取組んでいることや課題に感じることについて情報交換を行った。

・10/11
地域住民、自治会、物流倉庫事業者等の関係者が参加し、金沢区内を歩きながら地域特性を踏まえた避難行動につなげるための意見交換をした。

・10/17
地域住民が参加し、物流倉庫内を見学しながら
津波避難施設としての機能を学び意見交換をした。

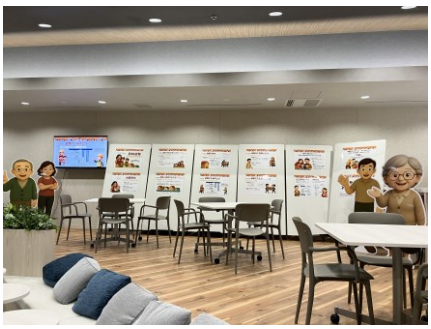
・10/26
自治会が参加し、物流倉庫内を見学しながら
津波避難施設としての機能を学び意見交換をした。

・12/4
地域住民や自治会が集まり、これまでの活動の振り返りと今後の方針・スケジュールを確認した。

■成果（提供者）
地域側が抱える不安や期待を把握することができ、今後の防災セッションや展示企画の方向性を検討・共有する場となった。

■成果（参加者）
直接顔を合わせて意見交換することで、日頃の地域の繋がりと災害時の連携体制を具体的にイメージできるようになった。</td><td>
 </td></tr>
<tr><td>事業内容①を実施する中で発生した課題や失敗点</td><td colspan="2">■発生した課題や失敗点
初回のため、事業の全体像が参加者に十分に伝わらない部分があった。
■乗り越えた方法
事前資料や説明の工夫により、参加目的やゴールをわかりやすく伝えるようにした。</td></tr>
<tr><td>事業内容①を実施する上で工夫した点</td><td colspan="2">意見交換が一部の参加者に偏らないよう、進行を工夫した。
特に立場や役割の異なる人々、防災に対する知識・経験が異なる人々が集まるため、専門的な課題や個別の課題に偏らせず、参加者それぞれが共感や共通認識を得られるファシリテーションを意識した。また参加者が安心して課題や意見を共有できるよう、双方向のコミュニケーションを重視した。</td></tr>
</table>

事業内容① 残課題等	・今後は、より多くの住民・ワーカーが参加できる仕組みづくりが課題である。 ・継続的に参加できる仕組みづくりも重要である。 ・参加できなかった関係者に対して連絡会の内容や方向性を適切に共有するための手段も検討が必要である。	
事業内容② 防災セッション		
事業内容②目標 （提供者側）	■防災教育の提供者 ・地域特性を踏まえた防災セッションを実施し、体験型防災教育のノウハウを蓄積する。 ・被災体験者の語りを通じ、参加者が自分事として防災を捉えるプログラム設計を行う。	
事業内容②目標 （参加者側）	■防災教育の参加者 ・発災時の行動を具体的に想定し、自身の置かれる状況を理解する。 ・避難行動や共助の重要性を体感的に理解する。	
事業内容② 実施内容 A （実施日:11/25）	■具体的な取り組み内容 【発災時の現状と課題対応を考えるセッション①】 被災体験者によるトークセッションを実施した。講師として、東日本東日本大震災において被災地の医療現場の最前線で対応にあたった医師を招いた。 講演では、発災直後の医療機関内の混乱や、医療資源・情報が限られた状況下で迫られた判断、患者や地域住民を支えるために現場で実際に行った対応について、自身の体験を交えながら具体的に語っていただいた。 参加者は自らの立場に置き換えて、発災直後の判断や行動について考える機会となった。 ■成果（提供者） 経験談とそこからの知見に関する講演を通じて、災害時の判断の難しさや共助の大切さを具体的に伝えることができ、実践的な防災教育の機会を提供できた。 ■成果（参加者） ・参加者からは「実際の体験談を聞くことで想像力が高まった」との声があり、防災意識の向上が見られた。 ・参加者アンケートでは、全員が「防災への関心や意識が高まった」「防災を自分ごととして考えるきっかけになった」と回答した。従来の防災訓練との違いで印象に残った点としては、多い順に「体験的で理解しやすかった」「自分で実践できる防災行動を考えるきっかけになった」「内容が身近だった」との回答が集まった。	
事業内容② 実施内容 B （実施日:12/13）	■具体的な取り組み内容 【避難行動と共助を考えるセッション②】 親子参加型の避難経路体験を実施した。物流倉庫内を見学しながら津波避難施設としての機能を学んだ。 講師として、東日本大震災当時、福島県において学童保育に携わっていた鎌田氏を講師として招き、震災発生直後の現場の状況や、子どもたちを預かる立場として直面した判断や課題について、お話しいただいた。 参加した地域住民は、平日昼間に大きな地震が発生した場合の行動や家庭での防災グッズ見直しについて、親子で話し合いを深めた。 ■成果（提供者） 経験談を通じて、避難生活の実情や家族で備える重要性	

	を具体的に伝えることができ、実践的な防災教育の機会を提供できた。 ■成果(参加者) ・参加者(大人)アンケートでは、全員が「防災への関心や意識が高まった」防災を自分ごととして考えるきっかけになった」と回答した。従来の防災訓練との違いで印象に残った点としては、多い順に「体験的で理解しやすかった」「内容が身近だった」「継続的な学びに繋がると感じた」との回答が集まった。 ・また子どものアンケートでは「家の人とどうひなんするかかくにんしたい」「ぼうさいリュックをつくる。」などの感想があった。	
事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点	■発生した課題や失敗点 大人と子どもで理解度や関心のポイントに差があり、一律の説明では十分に伝わらない課題があった。 ■乗り越えた方法 ・子どもにも理解しやすい説明や体験を重視した。	
事業内容②を実施する上で工夫した点	・事前に「親子で考えてほしいこと」を提示したり、講師が写真や防災グッズ実物を見せながら話したり、こどもが飽きずに最後まで聞けるような仕掛けを作った。	
事業内容② 残課題等	・今後は幅広い世代が参加できる時間帯や形式の検討が必要である。 ・単発の学びにとどめず継続的な振り返りや再確認の機会が必要である。 ・セッション内容を日常生活や職場での具体的な行動につなげていくためには、家庭内・職場内での話し合いや実践を促すフォローアップの仕組みも検討すべきである。	
事業内容③　防災備えパネル展示		
事業内容②目標 (提供者側)	■防災教育の提供者 ・発災時に直面する課題(避難指示のタイミング、正確な情報収集・伝達の難しさなど)や避難時の課題(避難経路の確保、家族との安否確認など)とその対応策を示す。 ・地域住民と働く人々が共助を学び、災害に強いまちをつくるための手引きとして、紙媒体(一覧性・世代対応力)とデジタル媒体(拡張性・即時性)を補完的に活用。 ICT の活用で防災教育の継続性を確保し、次年度以降の取組に発展させる。	
事業内容②目標 (参加者側)	■防災教育の参加者 ・避難所の役割や住民主体の運営が基本となることを学び、共助の必要性について理解する。	
事業内容② 実施内容 A (実施日:1/22～1/27)	■具体的な取り組み内容 【パネル展示による情報発信】 防災について考えるきっかけを与えることを目的に、地震発生から避難所生活まで、各場面でとるべき避難行動のポイントについてまとめた A2 サイズ・全 12 枚の啓発パネルを作成した。 パネルは物流施設内の共用スペースに展示し、勤務する人や来訪者に向けて広く周知をはかった。 ■成果(提供者) 発災から避難所生活までの各段階における課題と対応策を整理し、視覚的に分かりやすい啓発パネルとして体系化した。また物流施設内の共用スペースに展示することで、はたらく人や来訪者に対して、防災教育を日常の中で提供する手法を実践した。	

<table>
<tr><td></td><td>■成果（参加者）
地震発生から避難、避難所生活までの一連の流れをパネルで確認することで、発災時に自分が直面する状況や取るべき行動を日常の中で考えるきっかけが生まれた。</td><td> </td></tr>
<tr><td>事業内容②
実施内容 B
（実施日：1/21～）</td><td>【冊子と動画による情報発信】

■具体的な取り組み内容
地震発生から避難所生活まで、各場面でとるべき避難行動のポイントについてまとめた A5 サイズ・全 12 ページのリーフレットと、3 分 46 秒の動画を制作した。

リーフレットの展開先としては、物流施設内共用スペース（170 部）、物流施設テナント（15 部）、近隣鉄道会社（15 部）、金沢区自助連絡協議会（200 部）となった。

動画はパネル展示と一緒に物流施設内共用スペースのモニターで 6 日間リピート再生をおこなった。また冊子上に二次元コードからいつでも視聴できる。

さらに自治会向けデジタル回覧板アプリ Yumicom にて、周辺地域およびそのほか広域へ動画を周知した。

■成果（提供者）
発災から避難所生活までの行動ポイントを整理し、紙媒体（リーフレット）とデジタル媒体（動画）の両方を活用して発信できた。また物流施設、テナント企業、鉄道事業者、地域団体など複数の拠点を通じた配布・展開を実施し、幅広い層への情報提供ができた。

■成果（参加者）
冊子および動画を通じて、職場や家庭内において短時間でも繰り返し防災行動を確認できる環境を得た。
また、イラストを交えた読みやすい構成とすることで、防災に対して関心が高くない層やこどもにとっても、抵抗感なく内容に触れる機会となった。</td><td>

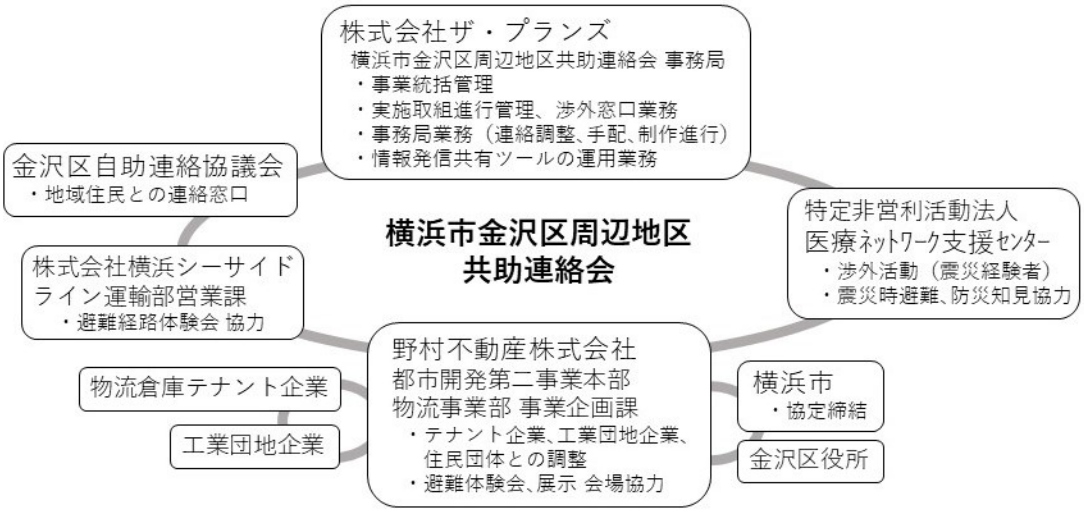
 </td></tr>
<tr><td>事業内容②を実施する中で発生した課題や失敗点</td><td colspan="2">■発生した課題や失敗点
専門的な内容や文章量の多い資料では、短時間で理解することが難しく、継続的な確認につながりにくいという点が課題となっていた。

■乗り越えた方法
イラストを交えた視覚的に理解しやすい構成とすることで、防災に積極的でない人や子どもでも抵抗なく内容に触れられるよう工夫した。</td></tr>
<tr><td>事業内容②を実施する上で工夫した点</td><td colspan="2">冊子と動画を制作し、職場や家庭内で短時間でも繰り返し確認できる非対面型の防災教育手法を導入した。物流施設内の共用スペースや、自治会向けデジタル掲示板など複数の接点を活用して情報発信を行うことで、幅広い層への周知を図った。</td></tr>
</table>

事業内容② 残課題等	・防災教材を継続的に更新・確認していく体制が十分に整っていない。 ・冊子や動画といった教材は整備できた一方で、それらを活用して職場内や地域で主体的に展開・促進する人材が限られている。

■参考資料※活動において必要な書類は全てご提示お願いします

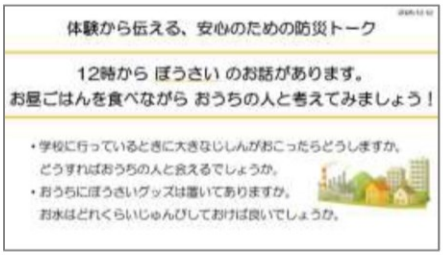
・運営体制図



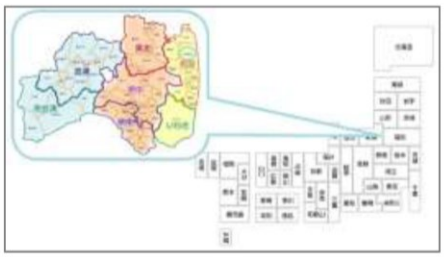
・研修/講演資料

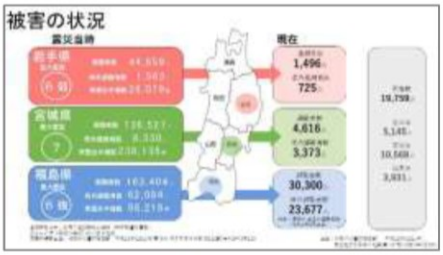
[セッション①告知物]

［セッション② 講演資料］

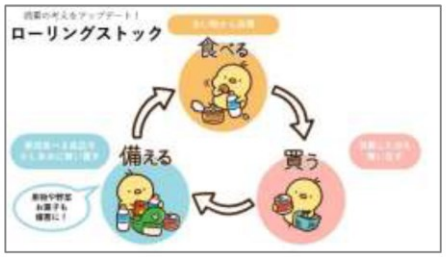

体験から伝える、安心のための防災トーク
12時から ぼうさい のお話があります。
お昼ごはんを食べながら おうちの人と考えてみましょう！
・学校に行っているときに大きなじしんがおこったらどうしますか。
どうすればおうちの人と会えるでしょうか。
・おうちにぼうさいグッズは置いてありますか。
お水はどれくらいじゅんびしておけば良いでしょうか。

体験から伝える、
安心のための防災トーク
【講師紹介】
2011年当時 学童保育指導員
鎌田 晃子 氏




被害の状況
震災直後
現在
岩手県
宮城県
福島県
1,496
725
4,616
3,373
30,300
23,677

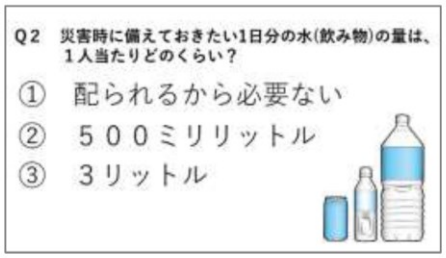
避難場所
連絡先
防災用品
家族会議
危険箇所チェック
地域活動


ローリングストック
食べる
買う
備える

ライフラインとは…？
生活を維持するのに最低限必要な設備や機能
例えば：
電気
水道
ガス
他にも：
物流
通信

柏市直下型の大地震が起きた際の被害想定
ライフライン
停電率
約92%
断水率
約65%
通信障害割合
約91%
都市ガス機能支障割合
約71%
【ライフラインの復旧にかかる目安】
電力・通信 ➡ 1週間
上下水道・ガス ➡ 1カ月

Q1 都市型災害の特徴として、あてはまらないものは？
① 被害が拡大しやすい
② 都市機能がまひする
③ 復旧が早い


Q2 災害時に備えておきたい1日分の水(飲み物)の量は、1人当たりどのくらい？
① 配られるから必要ない
② ５００ミリリットル
③ ３リットル

Q3　災害時にスマホがつながりやすいのは？

① コンビニ
② 駅
③ 高い場所

Q4　防災リュックの保管場所として、おすすめなのは？

① げんかん
② トイレ
③ ベッドの近く

Q5　地震に対する考え方として正しいのは？

① 必ず来る
② 自分は大丈夫
③ どうにかなる

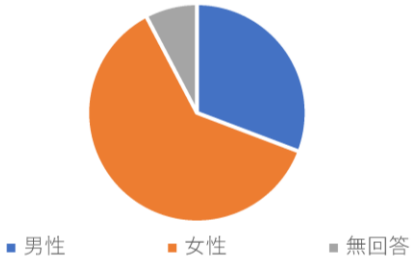
能登半島地震（2024年1月1日）　避難場所での様子

・使用した調査票、ヒアリング項目、集計結果

［セッション① 参加者アンケート結果］

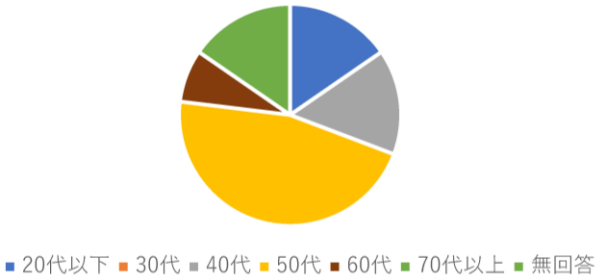
性別

項目	人数
男性	4
女性	8
無回答	2



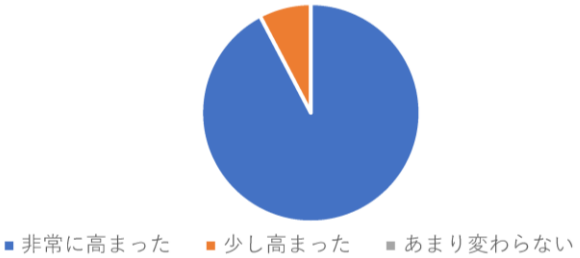
年代

項目	人数
20代以下	2
30代	0
40代	2
50代	6
60代	1
70代以上	0
無回答	2



セミナー参加前に比べて、防災への関心や意識はどのように変化しましたか。

項目	人数
非常に高まった	12
少し高まった	1
あまり変わらない	0

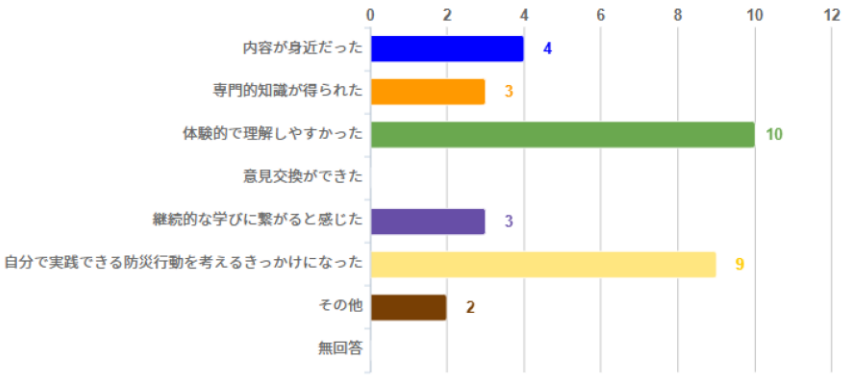


セミナーを通じて「防災を自分ごととして考える」きっかけになりましたか。

項目	人数
強くそう思う	12
ある程度そう思う	1
あまりそう思わない	0

今回のセミナーと従来の防災訓練との違いで印象に残った点は何ですか。

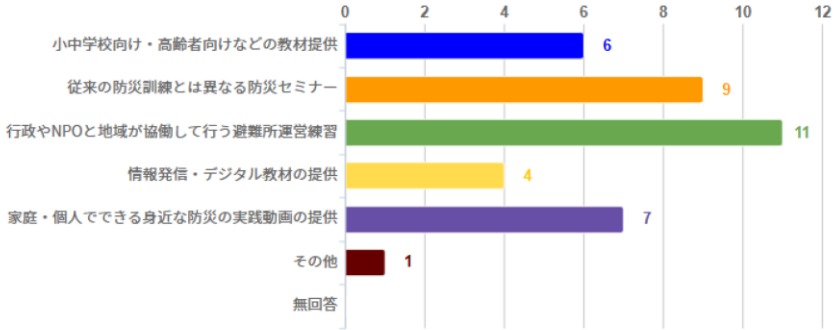
項目	人数
内容が身近だった	4
専門的知識が得られた	3
体験的で理解しやすかった	10
意見交換ができた	0
継続的な学びに繋がると感じた	9
自分で実践できる防災行動を考えるきっかけになった	2
その他	2



その他
- メディアでは、知ることのない事実があることを知れた。
- 自助かなの活動との必要性を感じ、参考にして取り組みたいと感じました。
- 気にして活動していましたが、福島の状況を伺い実際の課題に気付きました

防災教育を地域に根付かせるために必要だと思うことは何ですか。

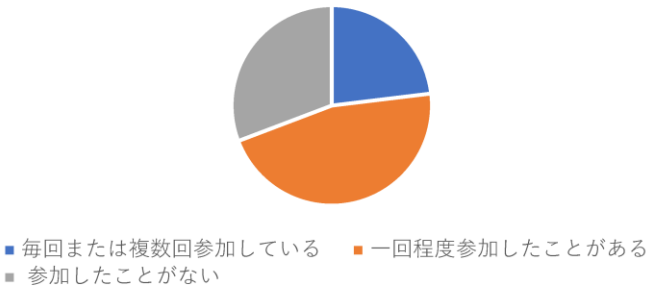
項目	人数
小中学校向け・高齢者向けなどの教材提供	6
従来の防災訓練とは異なる防災セミナー	9
行政やNPOと地域が協働して行う避難所運営練習	11
情報発信・デジタル教材の提供	4
家庭・個人でできる身近な防災の実践動画の提供	7
その他	1



その他
- 共助につながる地域の人と顔なじみ、顔みしりになること

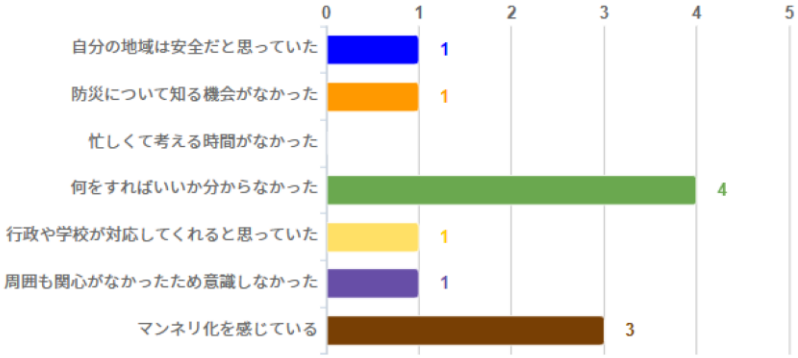
ご自宅地域で行われている防災訓練について、あなたの参加状況を教えてください。。

項目	人数
毎回または複数回参加している	3
一回程度参加したことがある	6
参加したことがない	4



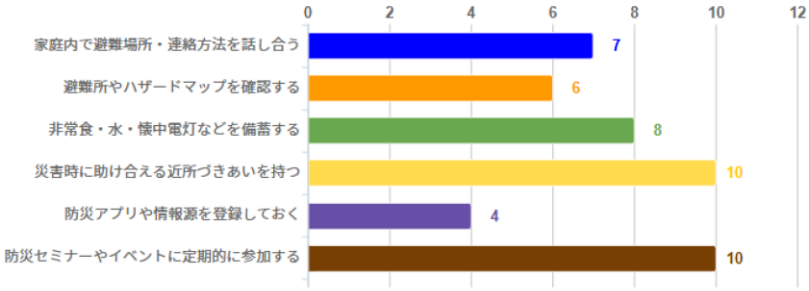
これまで防災についてあまり気にしていなかった場合は、その理由を教えてください。

項目	人数
自分の地域は安全だと思っていた	1
防災について知る機会がなかった	1
忙しくて考える時間がなかった	0
何をすればいいか分からなかった	4
行政や学校が対応してくれると思っていた	1
周囲も関心がなかったため意識しなかった	1
マンネリ化を感じている	3



今後、自分で取り組んでみたいことを教えてください.

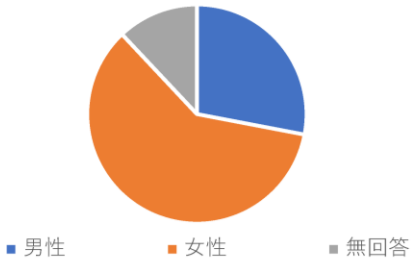
項目	人数
家庭内で避難場所・連絡方法を話し合う	7
避難所やハザードマップを確認する	6
非常食・水・懐中電灯などを備蓄する	8
災害時に助け合える近所づきあいを持つ	10
防災アプリや情報源を登録しておく	4
防災セミナーやイベントに定期的に参加する	10



[セッション② 参加者アンケート(大人)結果]

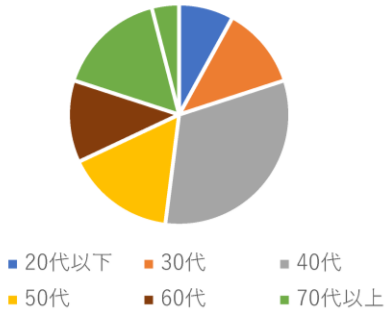
性別

項目	人数
男性	7
女性	15
無回答	3



年代

項目	人数
20代以下	2
30代	3
40代	8
50代	4
60代	3
70代以上	4
無回答	1



セミナー参加前に比べて、防災への関心や意識はどのように変化しましたか。

項目	人数
非常に高まった	17
少し高まった	7
あまり変わらない	0
無回答	1

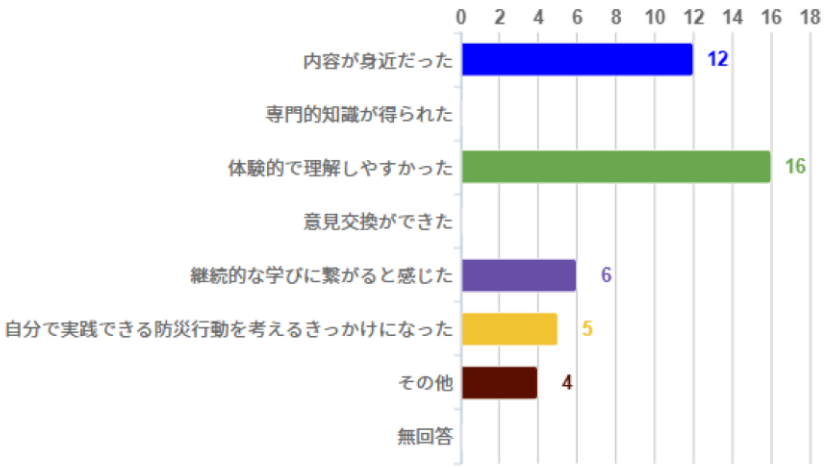
セミナーを通じて「防災を自分ごととして考える」きっかけになりましたか。

項目	人数
強くそう思う	19
ある程度そう思う	5
あまりそう思わない	0
無回答	1

1/3

今回のセミナーと従来の防災訓練との違いで印象に残った点は何ですか。

項目	人数
内容が身近だった	12
専門的知識が得られた	0
体験的で理解しやすかった	16
意見交換ができた	0
継続的な学びに繋がると感じた	6
自分で実践できる防災行動を考えるきっかけになった	5
その他	4



その他
- 防災グッズを購入する機会となった
- 一般の方のお話しがとてもよかった。
- 防災トークと防災訓練今まで経験ありませんでした。
- 自分で備えないといけないことを知った

防災教育を地域に根付かせるために必要だと思うことは何ですか。

項目	人数
小中学校向け・高齢者向けなどの教材提供	8
従来の防災訓練とは異なる防災セミナー	15
行政やNPOと地域が協働して行う避難所運営練習	11
情報発信・デジタル教材の提供	8
家庭・個人でできる身近な防災の実践動画の提供	10
その他	1

その他
- 小学校中学校の校庭が避難場所であるため、学校での防災セミナーの実施を考える必要があると思う。

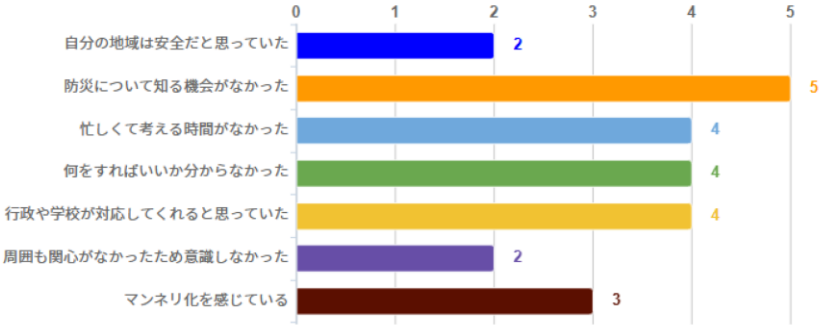
ご自宅地域で行われている防災訓練について、あなたの参加状況を教えてください。。

項目	人数
毎回または複数回参加している	7
一回程度参加したことがある	10
参加したことがない	8

■ 毎回または複数回参加している ■ 一回程度参加したことがある
■ 参加したことがない

これまで防災についてあまり気にしていなかった場合は、その理由を教えてください。

項目	人数
自分の地域は安全だと思っていた	2
防災について知る機会がなかった	5
忙しくて考える時間がなかった	4
何をすればいいか分からなかった	4
行政や学校が対応してくれると思っていた	4
周囲も関心がなかったため意識しなかった	2
マンネリ化を感じている	3



今後、自分で取り組んでみたいことを教えてください.

項目	人数
家庭内で避難場所・連絡方法を話し合う	17
避難所やハザードマップを確認する	8
非常食・水・懐中電灯などを備蓄する	18
災害時に助け合える近所づきあいを持つ	6
防災アプリや情報源を登録しておく	11
防災セミナーやイベントに定期的に参加する	7

[セッション② 参加者アンケート(こども)結果]

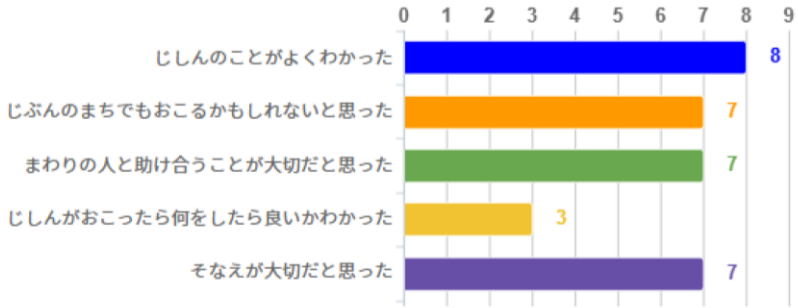
学年

項目	人数
小学１年生	3
小学２年生	2
小学３年生	1

項目	人数
小学４年生	1
小学５年生	4
小学６年生	1

震災のお話を聞いてどう思いましたか。

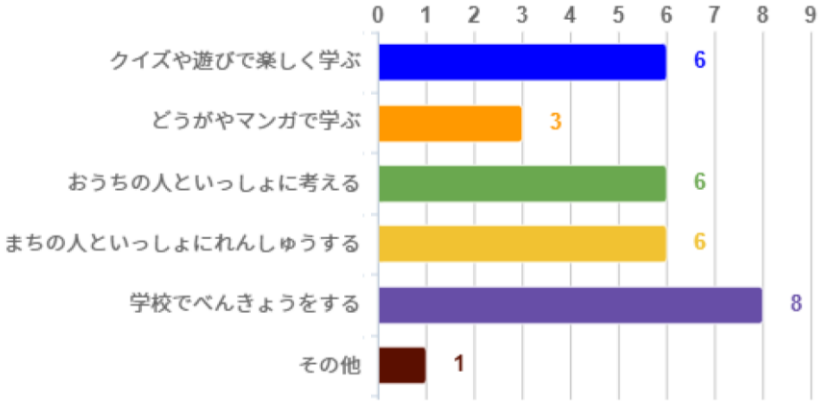
項目	人数
地震のことがよくわかった	8
自分のまちでも起こるかもしれないと思った	7
周りの人と助け合うことが大切だと思った	7
地震が起こったら何をしたら良いかわかった	3
備えが大切だと思った	7



みんながこれからも防災を学ぶために、大切だと思うことはどれですか。

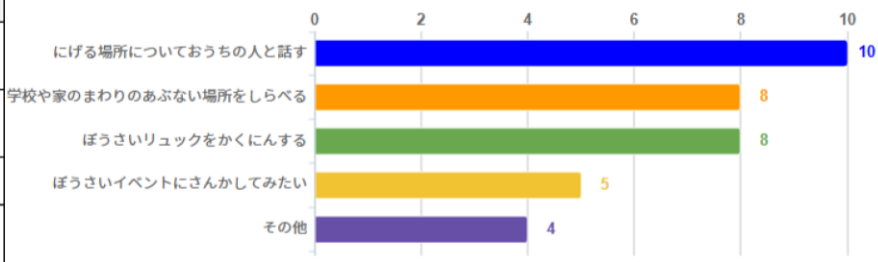
項目	人数
クイズや遊びで楽しく学ぶ	6
動画やマンガで学ぶ	3
おうちの人と一緒に考える	6
まちの人と一緒に練習する	6
学校で勉強する	8
その他	1

その他の回答
- 他の人ときょうゆうする。



今後、自分で取り組んでみたいことを教えてください。

項目	人数
逃げる場所についておうちの人と話す	10
学校や家の周りの危ない場所を調べる	8
防災リュックを確認する	8
防災イベントに参加してみたい	5
その他	4



その他の回答
- 家の人とどうひなんするかかくにんしたい
- 経験した人の話を聞きたい。
- ぼうさいリュックをつくる。
- あるいてるときつなみがおきたらでかいこうえんにひなんする。

1/1

・写真や図面、レイアウト

［セッション①記録写真］

発災当時の行動を語る様子

避難中の行動を語る様子

質疑応答の様子

［セッション②記録写真］

自己紹介・震災時の居住地の紹介

避難所で配給されたもの

日頃からバッグに入れておきたい防災用品

親子で聞き入る様子

アンケートに回答する様子

・スケジュール表

団体名：横浜市金沢区周辺地区共助連絡会

2025年（令和7年）

9月		
1	月	
2	火	
3	水	
4	木	
5	金	
6	土	
7	日	
8	月	
9	火	
10	水	
11	木	
12	金	
13	土	
14	日	
15	月	
16	火	
17	水	
18	木	
19	金	
20	土	共助連絡会①
21	日	
22	月	
23	火	
24	水	
25	木	
26	金	
27	土	
28	日	
29	月	
30	火	

10月		
1	水	
2	木	
3	金	
4	土	
5	日	
6	月	
7	火	
8	水	
9	木	10/26の資料準備等
10	金	
11	土	共助連絡会②
12	日	
13	月	
14	火	11/25のセミナーに向けた準備
15	水	
16	木	
17	金	共助連絡会③
18	土	
19	日	
20	月	
21	火	
22	水	
23	木	
24	金	
25	土	
26	日	共助連絡会④
27	月	11/25のセッション①に向けた準備
28	火	
29	水	
30	木	
31	金	

11月		
1	土	
2	日	
3	月	
4	火	冊子・展示パネル案作成
5	水	
6	木	
7	金	★予算計画書の作成〆切
8	土	
9	日	
10	月	★10月分経費請求〆切
11	火	
12	水	
13	木	
14	金	
15	土	
16	日	
17	月	11/25の資料準備等
18	火	
19	水	
20	木	
21	金	
22	土	
23	日	
24	月	
25	火	セッション①開催
26	水	12/13セッション②準備
27	木	
28	金	冊子・展示パネル制作
29	土	
30	日	

12月		
1	月	
2	火	
3	水	
4	木	共助連絡会⑤
5	金	
6	土	
7	日	
8	月	
9	火	
10	水	★11月分経費請求〆切
11	木	
12	金	
13	土	セッション②開催
14	日	
15	月	
16	火	
17	水	
18	木	
19	金	★中間報告書提出
20	土	
21	日	
22	月	
23	火	
24	水	
25	木	
26	金	
27	土	
28	日	
29	月	
30	火	
31	水	

2026年（令和8年）

1月		
1	木	
2	金	
3	土	
4	日	
5	月	
6	火	
7	水	
8	木	
9	金	
10	土	★12月分経費請求〆切
11	日	
12	月	
13	火	
14	水	
15	木	
16	金	冊子配布
17	土	
18	日	
19	月	
20	火	
21	水	
22	木	1/22～1/27 展示
23	金	
24	土	
25	日	
26	月	
27	火	
28	水	
29	木	
30	金	
31	土	★事業完了日

2月		
1	日	
2	月	
3	火	
4	水	
5	木	
6	金	
7	土	
8	日	
9	月	
10	火	★1月分経費請求〆切
11	水	
12	木	
13	金	
14	土	
15	日	
16	月	★最終報告書提出
17	火	
18	水	
19	木	
20	金	
21	土	
22	日	
23	月	
24	火	
25	水	
26	木	
27	金	
28	土	

・その他

[防災展示パネル]

内閣府　令和７年度　地域防災力の向上に資する
「コミュニティ防災教育推進事業」
即時避難
迷う時間が命を奪う
ここは海抜２ｍ
災害時に２ｍの浸水

わっ！
どうしよう
地震発生
その場に合った身の安全を確保
■自宅にいるとき
• 布団や枕など近くにあるもので頭を守る
• 丈夫な机の下に身を隠す
■職場にいるとき
• 棚・窓際・機械から離れる
• 机や作業台の下に身を隠す
■屋外にいるとき
• ブロック塀・看板・ガラス窓から離れる

STEP1 揺れがおさまったら

地震発生後
3～5分程度（目安）

出口の確保と状況の把握

■出口の確保

- ドアや窓を開けて逃げ道を作る
- 転倒した家具類やガラス破片などに注意する
- 台所の火を消す

■状況の確認

- テレビ・ラジオ・自治体などの情報に注意する
- 警報や避難指示が出ている場合は
  すぐに避難する

STEP2 家族と通信するには

地震発生後
5～10分程度（目安）

災害用伝言ダイヤル(171)の活用

- 災害用伝言ダイヤル(171)は、災害時に提供開始される声の伝言板のこと

- SNSも比較的つながりやすく有効
- **家族全員の安否確認が難しい場合でも、避難場所に向かう行動を優先する**

STEP3 避難行動中

地震発生後
20～40分程度（目安）

より早く、落ち着いた行動

■移動手段のポイント

- 車を使わない（やむを得ない事情がある場合を除く）

■津波避難のポイント

- 海抜５m以上の高台へ避難
- 鉄筋コンクリート造など、地震の揺れによる被害のない建物で３階以上へ避難

STEP4 避難する場所とは

周りの状況に応じた避難場所の選択

自宅

いっとき避難場所
周辺の状況や安否を確認するために一時的に集まる場所

広域避難場所
地震による延焼火災から身を守るために一時的に避難する場所

避難所
倒壊や火災により自宅で生活できなくなった場合に避難生活を送る場所

※外出先の場合は必要に応じて

帰宅困難者一時滞在施設
交通機関の運休などで帰宅が困難な場合に一時的に過ごす場所

STEP5 避難所に到着したら

正しい情報の共有と取得

■避難所の受付

- 世帯ごとに避難者カード（兼：安否確認票）を記入
- 避難者数のほか、負傷者、病人、要援護者の人数や状況を共有

■避難所での情報共有手段

- 情報板
- 非常用放送

STEP6 避難所で生活するには

地域住民による運営

■避難所運営のポイント

- 思いやりの気持ち
- 役割分担や班編成
- ルール作り

避難した全員がお互いを尊重し、
運営に協力していくことがとても大切

災害時の避難行動について
日頃から家族で話し合っておくことが大切

家族構成を考えて
備蓄品や非常持出品も準備しよう

備蓄品
- 飲料水（目安：１人１日３ℓ×３日分）
- 食料品
- トイレパック（目安：１人１日５回×３日分）

非常持出袋
- 懐中電灯・ランタン
- 携帯ラジオ
- 貴重品（現金・預貯金通帳・印鑑・健康保険証など）
- 各種 生活用品（紙皿・紙コップ・救急医薬品・常用薬・充電器・ウェットティッシュ・生理用品・ビニール袋・タオル・軍手・食品用ラップなど）

そのほか家庭に合わせて用意するものを考えましょう
（乳幼児・要介護者・妊婦・高齢者・ペットなど）

❶安否情報確認サービス

災害用伝言ダイヤル（171）
毎月１日, 15日は「体験利用日」であり
災害時以外にも試すことができる

練習してみよう

録音	再生
171を入力	
1を入力	**2**を入力
被災地の方の電話番号を入力	
1を入力	1を入力
録音	再生

❷健康管理

カードに自分や家族の健康情報を
書いて携帯すると良い

受診時に
役立てよう

記入項目（例）
- 持病
- 治療中の病気
- 使用中の薬
- 入院歴
- アレルギー
- かかりつけの病院
- 氏名
- 生年月日
- 連絡先

避難者同士が助け合い、命と生活を守る
「自分たちの地域を、自分たちで守る」

「共助」

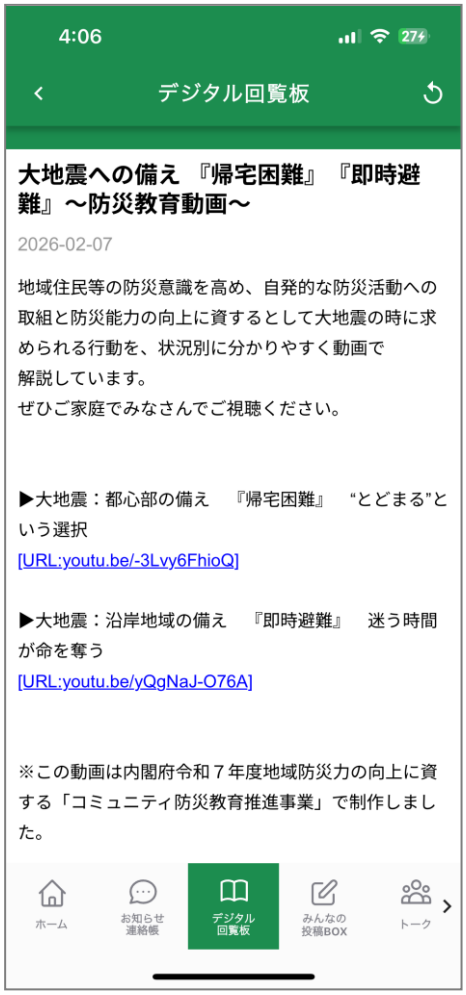
まずは思い切って地域防災活動などへ
参加してみましょう

動画でもご覧いただけます▶

参考資料
横浜市「防災よこはま」令和7年2月発行
横浜市「地域防災拠点開設・運営マニュアル」令和5年9月発行
横浜市「備蓄について」令和6年11月更新（令和7年12月閲覧）
https://www.city.yokohama.lg.jp/bousai-kyukyu-bohan/bousai-saigai/moshimo/wagaya/jishin/bichikuhin/bitiku.html
消防庁「防災マニュアル」令和7年10月更新（令和7年12月閲覧）
https://www.fdma.go.jp/relocation/bousai_manual/index.html

内閣府　令和７年度
地域防災力の向上に資する「コミュニティ防災教育推進事業」

企画制作：株式会社ザ・プランズ

［動画］
動画配信プラットフォーム　公開 URL：https://www.youtube.com/watch?v=yQgNaJ-O76A

［自治会向けデジタル回覧板 配信］